

3) 金堂

御本尊：救世観音菩薩像

金堂は、四天王寺の中心のお堂で、四天王寺の本尊であり、聖徳太子の本地仏とされる秘仏・救世観音菩薩像と、四方を守護する四天王像を祀っています。

また、壁面には中村岳陵筆の壁画「仏伝図」があります。



屋根は上下二重の入母屋屋根で、上層は中門と同じ鍔葺（しころぶき）となっています。

金堂の地下にある青竜池から「白石玉出の水」と呼ばれる霊水が湧き出ており、この水を境内の亀井堂に引いていると伝えられています。

お堂に入ると正面の巨大な救世観音像に迎えられ、その周りを時計回り方向の順路に導かれ壁画を鑑賞してゆく。釈迦の誕生から、出城、降魔成道、初転法輪、涅槃(ねはん)、までの物語がロマンチックに描かれている。

薄暗いお堂の中ですが、壁画の中のハイライトとされる部分に照明が当てられ、何とも神秘的な空間です。

全体的に鮮やかな色彩で、人物は滑らかな曲線で描かれており、近くで見ると装飾なども細やかに描き込まれています。

線的な表現の中にも面的な表現がなされたり、独特な光の表現の仕方も近代絵画の印象を受け、仏像や壁画自体の大きさに迫力があります。

四天王寺と金剛組

四天王寺の再建には、金剛組が貢献しています。金剛組の歴史は飛鳥時代にさかのぼる。西暦578年、聖徳太子が百済から金剛組の初代当主となる金剛重光らを招き、四天王寺の建立を任せたとされる。同年に創業し、当主は代々、四天王寺を守る「正大工職（しょうだいくしやく）」の役目を与えられている。

金剛組は、38代目当主は初の女棟梁が「命がけで」四天王寺五重塔を昭和15年再建しましたが、昭和20年戦争で焼失しました。

金剛組は、コンクリート工法を学び、四天王寺の金堂の再建を任された。

昭和30年には株式会社に組織を変更し、近代化の道を歩み始めた。

静岡文化芸術大学の曾根秀一専任講師（企業史）は「四天王寺と金剛組の千年以上も続く関係は、社寺建築業界の歴史で貴重な例だ。切っても切り離せない絆の象徴が今も残っている」と語る。